

紅葉

一名 高倉院

ワキ 清閑寺の僧

シテ 上童

ツレ 侍女

地は 京都

季は 秋

ワキ詞

「是は東山清閑寺の住侶にて候。去年上皇崩御ならせ給ひ。高倉院と申し奉り。此山に葬り奉る。御一周忌の御法事善尽し美尽し。心言葉も及び難し。今日は一七日結願の御事なれば。いよく陵を清め。香花を捧げ奉らばやと思ひ候。

シテ、ツレ次第

「君が御幸を今日問へば。く。帰らぬ旅ぞ悲しき。

シテサシ

「是は院の御所に住む上童にて候。さても上皇神上りましまし。

二人

「はや月重なり去年となり。今年の御法事時過ぎて。今日七日の結願なり。せめての事に御寺に詣で。拝し参らせん其為めに。

下歌

「歩み習はぬ歩行はだし。君が為めにと志し。

上歌

「九重の。空とはいへど此程は。く。民の歎きの心にや。涙曇りの春の色。たどりくゝて東山。清閑寺にも着きにけり。く。

シテ

「あら浅ましや御在世の時は賢王にて。人の慕ひ奉

る事斜ならず候ひしに。いかなれば死の道。三明
六通の羅漢もまぬかれず。幻術変化の権者も遁れ
給はず。

ツレ「悲しきかなや二十にも。成らせ給はぬ御身の。

シテ「然も慈悲心中に五常乱らず。

ツレ「末代の聖主と仰ぎしも。

シテ「御雲隠れの。

ツレ「習ひとて。

二人「女御更衣も宮仕へ申さず。郷相雲客の拝すもなく。

鳥の囀る花水の。住む人もなき御廟の体。あら定
めなや候。

ワキ詞「不思議やな是れなる上臈は。如何様大内にてもや

んごとなく常ざまの御方とは見え給はぬが。御廟
に香花を捧げ。悲歎の涙を流し給ふは。若し此院
の局町に宮仕へ給ふ御方か。

シテ「此方の事を宣ふかや。是は外の御所に住む者なる

が。常ならぬ御恩を受け。せめて陵を拝せんと。
はるく詣で候ふなり。

ワキ 「あら有難の御事や。則ち贈号高倉院と。よくく
御回向おはしませ。

シテ 「崩御の御名も高倉や。此世にかはらぬ花の台に。

ツレ 「必ず出御。

シテ 「ましませと。

地 「思ひの玉の数くりて。く。弔ひ申す志。さこ

そ尊霊も。請け悦ばせ給ふらん。十善の御身も。
賢愚も共に仮の世の。風の前なるともし火の。消
えて誰かは残るべき。く。

シテ 詞 「なふく御僧。此装束衣小袖御覧候へ。

ワキ 詞 「誠に色異なる御衣裳。何とて唯今改めて。仏前に
参り給ふらん。

シテ 「是は先帝より下し給はる御衣なれば。報謝の御為
め着しつゝ。御陵に参り申すなり。

ワキ 「さては左様にましますかや。其御いつくしみの謂
れ御物語候へ。

クリ地 「抑此君御在位の御時。我のみならず遠きは聞き近
きは拝み。延喜天曆の聖主にも越え給ひ。賢王の
名を揚げ給ふ。

シテサシ 「されば未だ幼主の御時より。性を柔和に受けさせ
給ひ。万の道に御心を寄せらる。

地 「中にも紅葉を愛せさせ給ひ。北の陣に。櫨楓の色
を移し。紅葉の山と名づけ。終日叡覧ありしとか
や。

シテ 「然るにある夜野分はしたなく吹いて。

地 「落葉斜ならず。明けなば叡覧あるべきと。御心が
けに鶏鳴を待たせ給ふ。

クセ 「五更も白めば主殿の。伴の宮つこ立ち出で。朝清
めするとて。ちれる紅葉をかき集め。縫殿の陣
にもて行き。酒あたゝめてたうべけり。奉行の蔵

人。御幸より先に行き見れば。木の葉一葉も残らず。如何にと問へば浅ましや。右のあらまし語るにぞ。さしも御秘蔵の紅葉を。跡方もなき有様。知らず汝等も。禁獄流罪。逆鱗にあづからんと。思はし事なう。案じつゞけて居たりしに。主上いとゞしく。夜のおとゞを出御あり。紅葉の山に御幸なり。紅葉を叡覧ましますに。葉は捨てられて空しき。梢いかにと宣旨あり。右のあらまし奏聞

す。君つくぐと聞し召し。

シテ
「林間に酒を煖めて。

地

「紅葉を焼くといふ。秋の詩の心を。かほど賤しき

其身の。知れるよな優しやと。天気甚だ心よく。打ち笑ませ給ふ御事。今のやうにぞ思はるゝ。又自らに装束を。給はらせ給ふ事。一方ならぬ御恵み。かすかなる里よりも。かづくに仕立てさせ。女の童持ち来り。夜戸出の荒き白浪の。寄せ来て

奪ふにぞ。せんかた涙落ちたぎり。悲しむ声の高
円や。大内山に響きしに。

シテ「鶏人曉を唱ふ声。」

地「明王の眠りを驚かす。御寝もならざるに。女の泣
く声を聞き召し。如何にと問はせ給へば。件のよ
しを奏すにぞ。御涙ぐませ給ひて。世にかだまし
き者あるも。わが心からと宣旨あり。中宮の御方
より。此装束を召されて。女の童に給はり。二た

び返し給ふなる。御心ざしの有難さを。思へば仏
の。大悲にいかで劣らん。有難や。(舞)
シテ「有難や。かゝる雲井の月影の。雲隠して入りぬら
ん。

地「定め無き世の中ぞ悲しき。中ぞ悲しき。く。
ロング地「げにや死出の山。く。浮世の旅に来る人は。越
えでかなはぬ道とかや。

シテ「北州の千年天人の五衰。其外生きとし生けるもの。

何れか世には留まる。

地 「西王母が百の年。

シテ 「東方朔が九千歳。

地 「名のみ残りて。

シテ 「今はなし。

地 「只何事も夢の世の。頼みなきこそ頼みなれ。昔の
玉の台も。なからん後は何ならず。及ばずながら
御跡を。弔ふ法の心ざし。まこと報謝の舞ならん。

く。